



主日礼拝説教—2017年6月25日

喜ぶ—しかし、何を

聖書 イザヤ書 60章 19～22節

フィリピの信徒への手紙 2章 12～18節

古屋裕子 牧師

◆あなたは星のように輝く

主イエス・キリストの使徒パウロは、獄中で記したと言われる手紙の中で、こう呼びかけています。「わたしの愛する人たち……自分の救いを達成するように努めなさい」（フィリ2:12）。自分で自分を救える人などいません。しかし、パウロは「あなた自身の救いを達成しなさい」と語りかけます。救いが完全に達成されるまで歩みを止めてはならない、と呼びかけます。神の救いへの招きを途中で聞かなくなるのが、わたしたちの最も大きな問題であるからです。救いの業を継続されるために、神は、わたしたちを教会へと招かれます。「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです」（フィリ2:13）。

神が望まれることを一度や二度意識することは、難しいことではありません。重要なのは、どのような状況にあっても、神の子として歩み続けることです。そうすれば、いかなる闇の時代にあっても、あなたは「星のように輝く」（フィリ2:15）と、と聖書は語りかけます。

わたしは先週まで、アメリカのミシガン州でアメリカ改革派教会の諸教会を巡る研修に参加していました。アメリカ改革派教会は、アメリカで最も古いプロテスタントで、日本で伝道を始めた最初のプロテスタント教会です。ミシガンという土地柄、どの教会も数百名から数千名の人々が集い、すべての世代が元気に礼拝していました。キリスト者人口が1パーセントに満たない日本の教会の話をする時、「まるで初代教会のようだ」と大げさに目を丸くし、その健闘を誇りに思うと言って、会ったこともない日本のキリスト者のために祈ってくれました。

ひとりの宣教師が、次のような話をされました。アメリカの国立公園にある世界最大の鍾乳洞マンモスケイブのツアーに参加した時のお話です。皆で小さなライトを持って洞窟の中に入って行くのですが、ガイドが「ここですべての明かりを消してみましよう」と提案したそうです。ライトを消すと、経験したこともない真っ暗闇になり、身動き一つとることも恐怖だったと言います。そこでガイドは、自分のライトを灯しました。たった一つのガイドのライトは、巨大な暗闇にほんの小さな光でした。しかし、しばらく見つめているうちに、その一筋の光が、どんどん広がり、周りを照らしていく様子を皆が目撃したのだと言います。

マンモスケイブでなくても、プラネタリウムをご覧になったことはおありでしょうか。プラネタリウムの上映は、夜が更けていく様から始まります。普段、わたしたちが肉眼で見る空は、夜でも町が暗くなりきらないので、確認できるのは星の中でも特に明るい星たちです。その空をさらに暗くしていくと、星座の見分けもつかないほど、名前も知らない無数の星が姿を現し、夜空を埋め尽くします。

エジソン以前の人々は、わたしたちが見ているよりも暗い、深い闇の中で星空を眺めていたのかもしれませんが。かつて信仰の父アブラハムが「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよ



い……あなたの子孫はこのようになる」(創15:5)と神に言われた時に仰いだ空とそう変わらない星空を、古代教会の人々は眺めることができたのかもしれませんが。おびただしい数の見えざる星があります。わたしたち人間の目には、神のお与えになる本来の輝きが見えず、この世の富や誇りの方が輝いているように見えるのです。

フィリピという町も、ローマの植民都市で、皇帝礼拝と並んで他の神々の礼拝が行われていました。異教社会の中で産声をあげたばかりの教会は、自転車をこぎ出したばかりの人のように、必死にこぎ続けなければならない不安定さのただ中にあります。それでもパウロは、フィリピに始められたこの小さな家の教会が、その取るに足らない光が、世界の光となって輝き続けることを確信しています。

◆「喜び」の問題 ―でも、どうやって？

新約聖書には、パウロの手紙がいくつも収められていますが、この手紙には、他の手紙にあるような嘆きや叱責など、波乱に満ちたやり取りはありません。この手紙は、「獄中書簡」という名を持ちながら、「喜びの手紙」という異名で知られています。投獄と喜び、迫害と喜びといった相反することが記されており、ただ読むだけなら、何か異様な感じを受けるかもしれません。パウロは今日の短い箇所でも「喜び」を繰り返し語るのです。「たとえわたしの血が注がれるとしても、わたしは喜びます。あなたがた一同と共に喜びます。同様に、あなたがたも喜びなさい。わたしと一緒に喜びなさい。」(フィリ2:17-18)。

「喜びなさい」と言われて、素直に「はい」と言えることばかりではないと思います。「喜び」というものは感じるものですから、知的に理解するものではありません。喜ぶよう意志することは、何か不自然で「喜び」の本質と離れてしまうように思います。「喜びなさい」と言われて、「そうは言っても」と思うことがあります。自分にはパウロのような熱烈な喜びがない、信仰の喜びが薄いなどと感じている人は案外少なくありません。いつも喜んでいられるわけではありません。まして逆境で「喜びなさい」と言われても、「いったいどうやって」と漠然とした問いが残ります。

以前、ある神学者(左近豊)の話聞いてハッとさせられたことがあります。何かを感じる感情は、一見、非論理的で、人間の本能のように思うのですが、これは文化や習慣によって教えられるものだという事です。例えば、日本人は雨を表現するのに百の言葉を持っているそうです。気候の話ではなく、五月雨や長雨という独特の感情があります。梅雨と聞くだけで鬱陶しい気持ちになりませんか。雨だけで叙情的な詩になります。ところがこれを英語で表現するのが難しく、同じ雨を見てもアメリカ人は日本人と同じようには感じないことに気づいたと教えてくださいました。雨を見て物思いにふけったり詩を詠んだりしてしまうあなたは、やっぱり日本人だというわけですね。うれしい、悲しい、幸せといった感情は、わたしたちの中に突然降って湧いてくるものではなくて、共同体の中で習得していくものなのだという事です。「学習が無ければ、人は悲しみという感情を本当に理解することなく成人してしまう」と、ある教育学者(齋藤孝)は言いました。わたしたちの心に悲しみがやって来るとき、わたしたちは共同体の一員としてそれを感じているのです。

ある司祭(ジャン・ヴァニエ)が、ブラジルの子どもの孤児院を訪ねた時のことを書いています。朝、40のベッドが収容される部屋に入ると、部屋のどこからも泣き声ひとつ聞こえなかったと言います。子どもがいないわけではありません。たしかにいます。彼は気づきました。子どもたちは、泣くことを



知らないのです。だれも聞いてくれない部屋、無関心な社会の中で、泣く意味はないのですから。

以前、わたしがいた教会には幼稚園がありました。あるお母さんが『こどもさんびか』を買って家で一緒に歌おうとしたそうなのですが、お子さんに見せると、「ぼくは悲しい讃美歌が歌いたいんだ」と返ってきたそうです。この子は自閉症を持ち、いつも楽しく賑やかにするよりも静かな交わりを好みました。保護者向けの集会で、お母さんは困惑しながら「悲しい讃美歌ってありますか」と聞いてくださいました。興味深く思いました。キリスト者でもそんな風に言える人はなかなかいません。悲しみを讃美歌で歌えるというのはすばらしいことです。悲しみを、神の子として、神の家族と共に歌うことだからです。

わたしたちは、この苦しみに、この悲しみに、何の意味があるのかと思います。答えは簡単ではありません。しかし、苦難の意味がわからなくても、わたしたちはそれを孤独にではなく、信仰共同体の中で経験していくのです。この共同体には、わたしたち自身を語る喜びの物語があり、悲しみの物語があります。わたしたちの心を注ぎだす喜びの歌があり、悲しみの歌があります。共に祈る言葉が与えられています。キリストにあって、悲しみに共感し、苦しみに連帯します。このキリストにある連帯そのものが、わたしたちの存在の深い喜びとなるのです。獄中で死を覚悟したパウロは、たとえ明日死ぬとしても変わらない喜びを見つめています。パウロはその喜びを伝え、「わたしと一緒に喜びなさい」とわたしたちを招きます。こうしてわたしたちは、ひとつの喜びに与り、この喜びが一人ひとりの「星」の輝きとなります。神は、今わたしたちの間で、変わることもない喜びを増し加え、救いの業を続けられます。すべての見えざる星々が、その本来の輝きを現すときまで。

説教要旨